

中学校音楽科「器楽」を支える力の育成を目指した授業について

—「器楽（合奏及び伴奏を含む。）」の授業内容の改善を通して—

山根 秀 憲*

（キーワード：中学校音楽科，器楽，和楽器，唱歌）

1. はじめに

近年、中学校音楽教員の採用試験に、和楽器を課す自治体が多くなっている。そのレベルは、西洋音楽に求められる力量と比較すると、必ずしも高いという訳ではなく、基本的な技能・知識を有しているか、に重点が置かれているように思われる。本学音楽コースに入学してくる学生に、和楽器に関する学習歴を尋ねてみると、「小中学校の授業で少しだけお琴をしました」との答えが多い。では、「これから和楽器への取り組みについてどう考えていますか」という問いに対して、「大学の授業を受けるだけです」という答えが返ってくる。本学では、お琴と三味線に関した実技に重点を置いた授業がそれぞれ1単位用意されている。それ以外の、雅楽、篠笛、尺八等の個々の楽器に関しては、個々の楽器を対象とした授業はない。「日本伝統音楽史」に関連する講義による授業があるが、この授業の中では授業時間の制約から、様々なジャンルに渡る実技を伴った体験は限られたものにならざるを得ない。また、学生自身も日本伝統音楽に関する学びの必要性を十分に認識しているとは言い難い。

「器楽（合奏及び伴奏を含む。）」は、「ソルフェージュ」「声乐（合唱を含む。）」「指揮法」「音楽の理論と歴史（作曲法・編曲法及び日本伝統音楽・諸民族音楽を含む。）」と共に、免許法上の必修科目であると同時に、本音楽コースの4年間に渡る学習の基礎をなし、中学校音楽科における器楽の活動を支える力を育成する要となる。これらの必修科目の学習成果の上に、選択科目でさらに発展的学習を目指す。

必修科目としての「器楽」では、西洋音楽・日本伝統音楽・諸民族の音楽等の器乐的側面を限られた授業数の中でバランス良く学習を展開する必要がある。中学校音楽科教員として求められる知識・技能にできるだけ多く触れ、各個人の興味関心に気づき、独自の学びを早めに開始し、さらに深い学びへと繋げていけるよう、そのきっかけになるような授業を計画し、絶えず改善に努めていくことが必要である。

2. 本稿の目的

本稿の目的は、第一に中学校音楽科教員として身につけておくべき器楽に関する知識・技能を学習項目毎にその内容を改めて確認し、それぞれの目標を示すことである。第二に、可能な限り多様な器楽の世界を体験し、関連する分野への広がり示すことである。第三に、これらを通して、中学校音楽科の「器楽」を支える力をどのようにして育成するかについてその筋道を示すことである。

3. 「器楽」の位置付け

「器楽（合奏及び伴奏を含む。）」は、「日本の伝統音楽（和楽器）」と共に、教育職員免許法施行規則第四条第一欄音楽の中で掲げられた教科に関する科目の一つである「器楽（合奏及び伴奏並びに和楽器を含む。）」に対応する授業科目である。そのため、「器楽（合奏及び伴奏を含む。）」の授業は、「日本の伝統音楽（和楽器）」の授業と一応の内容的な棲みわけを行いつつも、より広い器楽の世界を考慮した授業内容とする必要がある。

図1は、本学音楽コース開設の授業科目の内、教科の専門科目のみを抜き出し、それらの関係性を図示したものである¹。

必修科目5分野7科目の授業の目的及び主旨は、次の通りである²。

*鳴門教育大学 芸術・健康系教育部

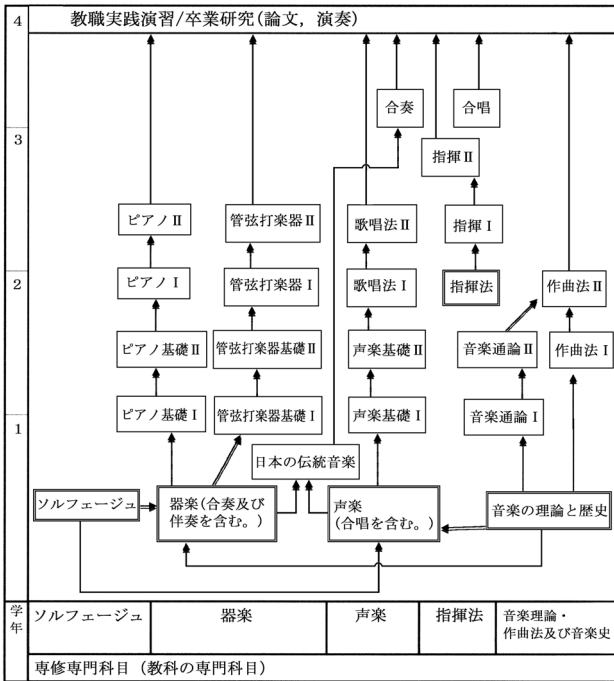


図1 「音楽科の教科内容を理解し授業を構成する力」(部分)(筆者により一部修正)

- 「ソルフェージュ」西洋の音楽を記述する手段として発達した5線譜を読み(視唱・視奏)、書く(聴音)ことを通して、上記のような音楽的能力(ソルフェージュ力)をのばし、演奏面および理論面に関する基礎的な技術、知識を習得する。」
- 「声乐(合唱を含む。)」発声の仕組みや呼吸と姿勢の関係性を理解し、歌唱の基礎となる自然で無理のない歌い方ができ、日本の唱歌(しょうか)や合唱曲、また諸外国の独唱曲等が声で表現できるようになる。」
- 「日本の伝統音楽(日本の伝統的な歌唱を含む。)」日本の伝統的な歌唱(長唄の基礎)を通して、日本の伝統音楽、特に伝統的な歌唱に関わる知識や技能を学び、日本の固有の文化や芸術美を体験し、発展的に異文化の理解や国際交流への推進の基礎となる表現力を身につける。さらに、単なる技術の修得のみに留まらず、伝統音楽における音楽表現のあり方や精神的理念について探究する。」
- 「器楽(合奏及び伴奏を含む。)」さまざまな楽器(和楽器を含む)の基礎的な知識や奏法を修得し、それぞれの楽器のもつ特色を考察する。またこれらの楽器による演奏を通して合奏と伴奏の基本を学び、その指導のあり方についても研究する。我が国をはじめ世界の諸民族の音楽を取り上げ、多様な音楽に触れる。」
- 「日本の伝統音楽(和楽器)」箏曲の実践などを通じて、日本の伝統音楽に対する認識を高め、次世代を担う子供たちに日本の伝統音楽(箏曲)の魅力、奏法などを的確に教育するための講義。」

○「音楽の理論と歴史」音楽の理論については、西洋音楽、日本音楽等における音構成理論(旋法、音階、調性、和声)及び時構成理論(拍節、拍子、リズム、フレーズ、楽式)について言及する。また簡単な作曲・編曲の演習を通して、理論を和声感、構成感等の実感と一体のものとして把握することを目的とする。また、鍵盤和声の演習を行い、音楽科の授業における伴奏実践の基礎力を養う。音楽の歴史については、世界音楽史の観点から西洋音楽史のみならず、日本の伝統音楽及び諸民族の音楽についても言及する。映像を見たり、音楽を聴いたりしながら、音楽史の流れを的確に把握することを目的とする。」

○「指揮法」音楽科の表現活動分野において重要な指揮に関わる幅広い技能、知識の紹介とその基本の習得を目指す。」

これらの授業科目は、「指揮法」を除いて全て1年次に履修する。「器楽」に関連する授業では、まず、1年次前期に、「器楽(合奏及び伴奏を含む。)」で、西洋楽器、和楽器、民族楽器の全般についての知識を再確認し、主要な楽器の奏法やその音楽について実習を伴った学習をする。同時に、「音楽の理論と歴史」の授業において、西洋音楽等における各種理論を学び、鍵盤和声や伴奏実践の基礎力を養う。続いて、夏休みの集中講義として、世界音楽史の観点から音楽史の流れを的確に把握する。そして、1年次後期から、「声乐」分野では、「声乐基礎I」「日本の伝統音楽(日本の伝統的な歌唱を含む。)」を、「器楽」分野では、「ピアノ基礎I」「管弦打楽器基礎I」「日本の伝統音楽(和楽器)」を、「理論」分野では、「音楽通論I」「作曲法I」を履修し、学年進行に沿ってそれぞれの分野への理解を深めてゆく。

「日本の伝統音楽」の分野に関して、「日本の伝統音楽(日本の伝統的な歌唱を含む。)」では長唄の実習を中心とした学習を、「日本の伝統音楽(和楽器)」では箏曲の実習を中心とした学習を行っている。日本の伝統音楽の内のそれ以外の分野、例えば、雅楽、尺八楽等の学習は、「音楽の理論と歴史」で触れられているとしても、非常に限られた時間での学習とならざるを得ない。

「中学校学習指導要領(平成20年3月)第2章第5節音楽 第3 指導計画の作成と内容の取り扱い 2 第2の内容の指導については、次の事項に配慮するものとする。」に述べられている「(2)器楽の指導については、指導上の必要に応じて和楽器、弦楽器、打楽器、鍵盤楽器、電子楽器及び世界の諸民族の楽器を適宜用いること。なお、和楽器の指導については、3学年間を通じて1種類以上の楽器の表現活動を通して、生徒が我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことができるよう工夫すること。」とされている。現在の学生の日本の伝統音楽や世界の諸民族の楽器に関する学習状況で、中学校音楽科での活動を

十分に計画し、実践していくことができるのだろうか。かといって、関連の授業を単純に増やすという訳にもいかない。現実には、大学の限られた授業の中で学んだことを頼りに、自らの音楽的関心に基づいて、独自に学習を深めていくことしかない。そこで、「器楽(合奏及び伴奏を含む。)」の鍵盤楽器以外の領域を担当している筆者としては、関係の授業担当者との連携のもとで、多様な器楽の世界から、西洋楽器、和楽器、民族楽器について知識のみならず、最も実りのある形での実習を含めた体験ができるよう授業を組み立てたい。上記の目的を果たすため、「器楽(合奏及び伴奏を含む。)」の授業内容と実施方法を絶えず探求し、その改善に努めることが必要である。

4. 「器楽」の授業担当者

本授業の担当者は、ピアノ分野の教員2名(内1人は、嘱託講師)、管弦打楽器分野の教員1名である。ピアノ分野の授業は、一貫してピアノ演奏に関わる内容を扱っている。筆者の担当する管弦打楽器分野は、表2に示したように、和楽器、民族楽器、西洋楽器と多岐にわたっている。どのような内容が相応しいのかを、現在もなお探求し続けている過程であり、年度によって扱う内容に違いが生まれている。

5. 受講者について

本授業は、中学校の音楽の免許を修得するための必修単位であるため、音楽コースに所属する学生(毎年6~8名)が全員1年次に履修する。さらに他コースの音楽免許取得希望者(毎年2~3名)と大学院長期プログラム履修生(毎年2~3名)が加わり、合計15名前後となる。音楽コース所属の学生は、ピアノ、声楽、管楽器、弦楽器についての学習経験が豊富なものもいるが、一方で、ピアノ学習のみに集中しており、その他の音楽の分野に対してあまり関心を抱いていないと思われるものもいる。

音楽コース所属の学生は、小学校専修、中学校専修にかかわらず、必修科目である本授業を受講することになる。受講者の大学入学以前の学習は、個人によって大きく異なる。大学受験の演奏試験をピアノ、管弦楽器、声楽で行ったものは、選択した分野に対する学習歴に比べ、それ以外の分野での学習経験は極端に少なくなっている。日本伝統音楽に関して、小学校の頃から継続的に学習を行ってきた、という受講者は、ほとんどないといつてよい。授業の学習単元「日本の伝統音楽を知ろう」で、「箏に少し触った」「阿波踊りで笛を吹いた」「尺八を見せてもらった」ということはあっても、「3学年間を通じ

て1種類以上の楽器の表現活動を通して」学習したという話をしてくれる受講者は少ない。幼少よりお稽古事として、ピアノを習うことはかなりある。しかし、お稽古事として「笙を習っていました」という話は聞かない。そこで、本授業の初めに「小中学校の音楽では、和楽器を用いた授業をするので、頑張って勉強しましょう」と伝えたとしても、学生の心の中に、「そうだ、頑張ろう」という雰囲気が出てこないのが現実である。このような状況を少しでも改善するために、授業だけでなく、学生生活全般においても、日本の伝統音楽や世界の民族音楽に関わろうとする気持ちを醸成するような授業運営を目指したい。

6. 授業方法

先も述べた通り、毎年15名前後の受講者があり、ここ数年は以下の方法で授業している。ピアノ分野を2名の教師で担当するため、ABの二クラス(一クラス7人)に分け、さらに1コマの授業を前半後半に分け、45分の間に3~4人の授業を行うことになる。一方、管弦打楽器分野は、ピアノの授業を受けていないときに、前半後半を入れ替えて授業を行っている。従って、45分の間に6~8人が授業を受けることになる。さらに、「合奏」と「伴奏」の授業を1コマずつ行っている。

7. 学習項目ごとの詳細

表1は、学習項目を15回の授業に振り分けたものである。

回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
学習項目	篠笛	尺八	三線	合奏	三線	唄三線	雅楽器	雅楽器	唱歌	伴奏	二胡/馬頭琴	金管楽器	木管楽器	木管/金管	試験

表1 各学習項目の割振り表

各学習項目の配列は、日本の伝統音楽に関する楽器から始め、途中に「合奏」「伴奏」を挟み、最後に主に西洋の管楽器を学習するようにしている。

次に、紙幅の関係から和楽器に関わる学習項目についてのみその詳細を述べる。

1) 篠笛

和楽器の管楽器の中で比較的取り組み易いのが篠笛であろう。小中学校の授業でも、「篠笛に親しもう」という題材の元、リコーダーとの比較を通して篠笛の特徴をつかませようとする実践例がある。

金森信午の指導案³で篠笛を取り上げる理由が以下の

ように述べられている。

我が国の伝統音楽をより身近なものとして捉えさせるために、教材として篠笛を取り扱うこととした。篠笛は、他の和楽器と比べ購入価格も安く入手しやすいうえに、手入れや修理などの管理がしやすい。また、篠笛は我が国の文化・歴史等にはぐくまれてきた楽器である。その奏法の最も特徴的なものの一つに、同じ音が続くときも、リコーダーのようにタンギングを用いず、指をはねることによって吹くことがあげられる。なめらかにつなぐ感じで、切れ目なく吹くことが美しい吹き方とされている。それを実際に鑑賞させたり演奏させたりすることによって、和楽器のよさや美しさなどを感じ取らせることができる。と考える。

リコーダー学習では、タンギングの重要さが強調され、その発展形としての多様なアーティキュレーションがあげられ、細かなニュアンスの表出に欠かせないとして指導の重要項目となっている。しかし、このタンギングの技法を小・中学生に求めるのは大変難しい。実のところ、教師にとっても、管楽器を中心に音楽を学習したものでないかぎりかなりの難しさを感じるようである。

篠笛など、日本の管楽器の伝統的な奏法では、タンギングを用いず、指切り（指をはねる）、指打ちという方法で音に区切りをつけることが多い。また、中国の伝統楽器である笛子、簫等も同様の奏法を基本としている。

祭囃子など地域の伝統行事でよく使われ、生徒たちにも馴染みのある篠笛であるが、実際の授業で導入するとすると、躊躇する教師は少なくない。筆者の指導経験でよく聞く「篠笛は難しい」という意見の一つの原因は、「笛を吹く」という言葉の連想から、「口笛を吹く」という動作を先に思い浮かべてしまうということである。口笛を吹こうとすると、必然的に唇を少し前へ突き出してしまふ。こうすると、確かに口笛は鳴る。しかし、この口の状態で篠笛を吹こうとしても、まず鳴らない。息の束が真円状になってしまい、低音は鳴ったとしても、高音を澄んだ響きで鳴らすことはできない。こうした場合の指導ポイントは、以下の要領である。

- ①唇を窄めずに、むしろ横に少し引く
- ②下顎を少し前へ出す
- ③唇から出る息の束を丸よりも平たい状態にするようイメージする
- ④左手親指（又は、フルート持ちの場合は、人差し指の付け根あたり）で、篠笛をした唇の方向に少し押し付けるようにする

このようなポイントを生徒が互いに相手の様子を観察しながら練習すれば、コツを早くつかむことができ、篠

笛の発音のコツをつかめば、それを尺八へと応用するのは比較的容易である。

この音だしのコツを指導できれば、授業で「生徒全員が音を出すことができる」ようになるのも決して無理なことではない。

用いられる楽譜は、流派によって様々であるが、本授業では譜例1のような縦譜を用いる⁴。漢数字による譜字は呂音（低音）を、アラビア数字による譜字は甲音（高音）を表す。主に楽器の指使いを示しており、この譜字を唱歌（しょうが）として口で唱えるため、奏法名唱法である。

○目標

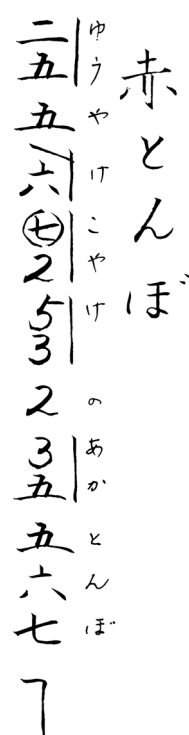
- (1) 基本的な奏法・演奏姿勢が分かる
- (2) 呂音（低音）の音が出せる
- (3) 簡単な旋律が吹ける

2) 尺八

竹管の尺八は、高価であるため、一クラス全員分の楽器を用意することは難しい。そのため、ほとんどの授業実践では、鑑賞としての扱いとなっている。そうしたなか、高木いづみ、藤井浩基の実践⁵では、「尺八の音色の魅力を感じ取ろう」という題材の元、ペットボトル、塩化ビニル管尺八25本、尺八10本を用いて、「実際に尺八を吹き尺八の奏法や独特の響きを感じ取る」ことを目指している。そして、生徒からの「尺八は曲に込められている感情をととても豊かに奏でられる楽器なんだなあと感じた。」「同じ音でも表現の方法によって色々な音色を出せて奥が深いと思った。」という意見は、尺八の音楽を鑑賞としてではなく、表現の領域として捉えていることを示している。その際、用いた楽器に本物の尺八が10本も準備されていたことの影響を見逃してはならないであろう。

本授業では、竹管尺八3本、木管尺八7本を用いており、一応、本物の尺八を吹奏体験することが可能となっている。篠笛の授業で音を出すコツに気づいた受講者は、尺八でも工夫次第で楽に出せるようになる。しかし、尺八特有の注意点についての理解が必要である。その注意点を以下にあげる。

- ①唇を窄めずに、むしろ横に少し引く
- ②下顎と下唇を尺八頭部の穴に入れ込むようにイメージする
- ③唇から出る息の束を丸よりも平たい状態にするようイメージする



譜例1
篠笛譜

④楽器の角度を調整して音のでるポイントを探す

以上の点を念頭におき、試行錯誤を行なう。一度出ても、次にはまた出なくなってしまうため、何度も、唇を歌口に当てるところから繰り返すとよい。音が出たとしても、リコーダーのようにきれいな音になるとは限らない。空気の混じった、かすれたような音になることもしばしばである。しかし、これは単に失敗した、とみるべきではなく、このような音も尺八の持つ魅力の一つであることを理解し、その可能性を追求することがむしろ重要である。こうした探求の繰り返しの後に、安定した音が出せるようになる。

用いられる楽譜は、一般には譜例2のような縦譜である⁶。ここでは、都山流の楽譜を示した。片仮名の譜字は主に楽器の指使いを示しており、この譜字を口で唱えることになるが、これも奏法名唱法による唱歌である。

○目標

- (1) 基本的な奏法・演奏姿勢が分かる
- (2) 乙音(低音)の音が出せる
- (3) 簡単な旋律が吹ける

3) 三線

次に、日本の楽器である三線を取りあげる。諸説あるものの、三線のルーツは中国の三弦(サンシエン)であると言われている。それが、大阪に伝えられ、三味線として独自の進化を遂げ、さらに、多様な三味線へと分化し、多様な音楽を形成するにいたっている。1年次後期の「日本の伝統音楽(日本の伝統的な歌唱を含む。)」で、長唄の先生が長唄三味線も含めて授業されることになっている。そこでは、具体的な三味線の奏法や口三味線についての学習が行われる。そのため、本授業では、まず三弦に触れ、三線との違いを体感し、撥で弾く弦楽器の弾き心地を体感し、本調子、二上げ、三下げという三味線と共通する調弦法を知る。三線の学習で用いられる工工四(く

4	糸	六段調	(八橋檢枝作曲)
レ	ツ		
ロ	ミ		
。段	ミ		
レ	ツ		

譜例2
尺八譜

中	安里屋ゆんた本調子
工	
七	
合	
四	
七	

譜例3
三線譜

んくんしー)によって、ドレミ式ではない学習方法を体験する。譜例3は、「安里屋ゆんた」の冒頭部分である⁷。「中」「工」等は、三線の弦上のポジション(勘所)であって、音名ではない。調弦(ちんだみ)が変われば、同じ「中」でも実際の音高は変化する。これは、三味線の場合と同様である。

そして、最近のポップス界で人気を博している三線を使った音楽を一部分ではあるが演奏してみる。ポップスを通して三線を知り、沖縄民謡や沖縄古典音楽に関心を抱き、さらに、共通項を多く持つ三味線の音楽へと学びを広げていくことを期待している。こうした道筋によるアプローチも有効であると考えている。

○目標

- (1) 基本的な奏法・演奏姿勢が分かる
- (2) 「本調子」「二上げ」「三下げ」の違いが分かる
- (3) 簡単な旋律が弾ける

4) 雅楽器

中学校での授業実践例として藤枝美弥子の指導案⁸で次のように述べられている。

日本の伝統音楽の鑑賞活動においては、その楽器が醸し出す日本風だと感じる音を聴き取ることはできる。またそれが、落ち着くと感じることや、心に残ると感受することもできる。しかし、その楽曲を取り巻く音楽文化の理解や、音の重なり、間などを緻密に感じ取ることには課題がある。それは、普段はあまり耳にすることのない楽器の響きや、日本の伝統音楽独特の旋律の重なり方などの理解が不足しているからである。

このように、雅楽器や雅楽の重要性を強調しても、この音楽は日常生活からやや離れた世界の出来事として生徒たちは感じている。これは、実は教師とでも同様であろう。このような状況では、「和楽器の指導については、3学年間を通じて1種類以上の楽器の表現活動を通して、生徒が我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことができるよう工夫すること。」が求められていても、雅楽を取り上げ、3学年間を通じて学習し、管弦の合奏や舞楽の活動まで広げていこうとする実践を展開するのは非常に困難である。

現実問題として、吹物(箏、龍笛、笙)、弾物(楽箏、楽琵琶)、打物(鉦鼓、羯鼓、楽太鼓)などの楽器の基本セットを1セット用意することすら難しい。しかし、課外活動としてではあるが、吹奏楽器がほとんどの学校に整備されたことに鑑みれば、全く不可能ということではないはずである。吹奏楽器の導入が進んだ背景には、指導する教員の熱意があった。教員が更なる熱意を持ち続

けることができれば、学習環境を少しでも改善へと向けることが可能であろう。その環境が整うまで手をこまねいているわけにはいかない。できることから積極的に取り組むことが求められている。

一つの方法は、代用楽器を使用した合奏である。伊野義博の実践例⁹では、「越天楽今様」を題材として、リコーダー、鉄琴、オルガン、アコーディオン、鍵盤ハーモニカ、トライアングル、大太鼓などを用いた器楽合奏を基本として、可能なものから箏などの和楽器と入れ替え、最終的には、「和楽器だけで『越天楽今様』の演奏にチャレンジ」している。この学習のねらいを次のように述べている¹⁰。

まず学習のねらいですが、それぞれ「伝統音楽の旋律や響きの特徴を感じ取ったり、曲想を生かして表現したりする能力を育てる。」「日本のふしに親しみ、旋律の素朴さを感じ取るとともに、表現の工夫をさせる。」とあり、日本の伝統的な音楽の響きや旋律の特徴を感じ、表現することに焦点化されています。そしてそのために、生徒に「ふしの感じを味わったり、情景を想像」させながら表現させようとしています。また、器楽合奏や雅楽と関連させ、雅楽越天楽の演奏を意識して音を重ねたり、雅楽越天楽と聴き比べをしたりすることを呼びかけています。具体的には、歌詞の意味、旋律の日本の特徴を押さえ、歌唱による表現をしたり、器楽合奏を行ったりする活動です。

伊野の「越天楽今様」を教材に授業化を試み、雅楽越天楽との関連を考慮した実践は、「伝統音楽の旋律や響きの特徴を感じ取ったり、曲想を生かして表現したりする能力を育て¹¹」ようとしている点で重要である。

音楽コースの学生は、多くの場合、幼少よりピアノ学習を続けている、合唱部や吹奏楽部に所属していた、という継続的な学習体験を通して音楽を愛好する心情を深めてきた。単なる鑑賞のみによって深まったわけではない。器楽分野からすれば、必ず楽器との直接的な出会いがあったといえる。残念ながら雅楽に関しては、DVD鑑賞と写真を用いての楽器解説に止まっていると言わざるをえない。筆者自身も、学生時代に雅楽の授業で、龍笛と箏に出会い、それまでの西洋音楽だけの音楽生活に新たな視点を加えられたことを鮮明に記憶している。

この出会いが、筆者自身の篠笛・尺八への関心を深め、更に中国伝統音楽の探求へと向かわせた。このような体験から、受講者たちには、日本伝統音楽であると言われながらも、かなりの縁遠さを意識せざるを得ない雅楽の世界にも目を向けて欲しい。

そのための第一歩は、直接的に本物の楽器に触れるこ

とである。

箏は、「地に在る人の声」といわれ、「雅楽の中では、その堂々とした音色を生かし、主旋律を演奏¹²」する。盧舌の調整はある程度の修練が必要であるが、適度に調整された盧舌を用いることができれば、音を出すことは可能である。一度音が出せたなら、自身の唇に感じる盧舌の振動を直接的に受け取ることができ、次第に音孔を塞いで最低音に達するとき、小さな管体の振動が指先を通して伝わってくる。そして「塩梅」の技法に簡単に触れてみる。このとき、雅楽の響きの圧倒的な印象の根幹に触れることができるであろう。

龍笛は、「天と地の間を泳ぐ龍の声」と言われ、雅楽の楽器の中では広い音域を生かし、低い音から高い音の間を縦横無尽に駆け抜けるように、箏の主旋律に絡み合うように演奏する。受講者は既に篠笛を体験しており、比較的容易に音をだすことができるものの、ある程度旋律を吹けるまでには時間を要する。

笙は、「天から差し込む光」と言われ、「合竹」によって生まれる微妙に移りゆく和音が、雅楽の一曲のほぼ全編にわたって響き渡る。多様な和音へ移り変わるものの、合竹名（乞、工等）の全ての和音に、行（実音 A 音）、七（実音 H 音）の長 2 度のぶつかり合った音が含まれており、全曲を通して統一感が醸し出される。「気替え」によるハーモニーの強弱の波、「手移り」による揺れ動く光の瞬き、これらが一体となって音楽の息遣いを生み出している。図 2 は、笙の実習の様子である。



図 2 笙の実習

○目標

- (1) 箏、龍笛、笙の基本的な奏法・演奏姿勢が分かる
- (2) 箏、龍笛、笙の発音原理の違いが分かる

5) 唱歌（しょうが）

唱歌は、日本伝統楽器の学習や伝承のために発展してきたものである。中学校学習指導要領解説音楽編¹³で、「(3)我が国の伝統的な歌唱や和楽器の指導については、

言葉と音楽との関係、姿勢や身体の使い方についても配慮すること。」とし、「唱歌に見られるように、楽器の演奏においても言葉の存在が音楽と深くかかわっている。」と、唱歌の意義を指摘している。それにもとづいて多くの学校現場での実践が報告され、成果を上げている。唱歌に直接的に関わる授業は、「日本の伝統音楽(日本の伝統的な歌唱を含む。)」 「日本の伝統音楽(和楽器)」である。これらの授業では、箏、三味線で用いられる唱歌を用いて学習をすることになる。また、「音楽の理論と歴史(作曲法・編曲法及び日本伝統音楽・諸民族音楽を含む。)」では、日本伝統音楽全般で用いられる唱歌について学習がなされるが、限られた時間のなかで、雅楽器、篠笛などの唱歌について学びを深めることは難しい。従って、本授業では、個々の楽器を実際に手に取りながら、それぞれの楽器の学習過程で用いられる資料によって唱歌のありかたを体験できるようにしている。「ハイトロ」(笛)、「コーロリンシャン」(三味線)等のように、楽器によってその奏法を特徴付けるような擬聲音が当てはめられ、奏法、リズム、フレーズのまとまり、ニュアンス等が同時に伝えられる。

例として、江戸祭囃子の篠笛の唱歌について述べる。茂手木潔子は、篠笛の唱歌で用いる発音と特徴を次のように簡潔に示している¹⁴。

篠笛は、夕行、ラ行、ハ行、ヤ行などが中心になり、メロディに近い旋律を、語呂のよいように組み合わせよう。最高音は「ヒ」で表し、低音域を「ト」と「ロ」で表す。

このことを手掛かりとして、唱歌と実際の演奏との関係を、譜例4に基づいて簡単に説明する¹⁵。

最初の音「ト」(ミ音)は、甲音でも低い音でありアクセントも持たず、特に強調する必要がない。そのため、toというあまり緊張感のない子音と母音の組み合わせとなっている。二つ目の「ト」(ラ音)は、甲音でも高い音

練習番号11の5～6小節目

譜例4 「唱歌」より第一楽章江戸囃子の部分
(唱歌と指使い図は、筆者が記入した。)

であり、吹き込む息のスピードも少し速くなり緊張感も増す。この事を考慮すると、唱歌は、「ト」よりも幾分鋭さの増す「テ」「チ」でもよいのかも知れない。しかしながら、ここではあえて同じ「ト」が用いられている。この理由は、このフレーズ全体のレガート感を生み出すために同じ「ト」を用いていると推測できる。甲音のミ音からラ音へと移る時、レガートに吹いたとしても、音のテンションにかなりのギャップを感じる。それに更に「テ」「チ」のe, iの母音を用いると、かえって唐突な音になってしまう。そのため、ここでは子音も母音も変えないことによって滑らかさや統一感を生み出そうとしたのである。

このように、唱歌は、音楽的な要求と楽器の音響的特性を考えた結果として生まれ、その音楽のエッセンスを伝えるために代々引き継がれてきた。従って、唱歌を唱えることによって、篠笛を吹くときに生ずる体に感ずる緊張と弛緩の基本的な繰り返しを体験していると言える。この唱歌を反復練習することによって、音楽の要素と楽器を吹くための身体的要素を同時に習得することが可能となる。また、祭囃子を演出するに欠かせない太鼓の唱歌も合わせて学ぶことにより、祭囃子の音楽的エネルギーが十分に引き出されることになるであろう。

○目標

- (1) 唱歌(しょうが)の役割が分かる
- (2) 篠笛の簡単な唱歌を唱えることができる
- (3) 箏の簡単な唱歌を唱えることができる

8. 関連する授業科目

本授業では、図1に示したように、次に続く幾つかの授業との関連性を、受講者に十分に認識させることが大切である。それによって、自らの次なる学習をどのように設計するかを考えることになる。次に、表1に示した学習項目毎の各授業との関連について述べる。

1) 篠笛・尺八

篠笛・尺八については、「器楽」終了後の集中講義「日本伝統音楽史」においてより広い視野から学習する。既に楽器を吹いたことがあるという自信が、音楽史の学習に強いモチベーションを与えてくれるであろう。

2) 三線

三線は、三味線と密接な関係にある。1年次後期に履修する「日本の伝統音楽(日本の伝統的な歌唱を含む。)」は、長唄を中心に授業が展開され三味線の実習を行う。三線と三味線とでは、細部における違いはあるにしても、共通点は非常に多い。基本的には、どちらも唄いながら楽器を演奏する。三線に続いて、三味線に取り組むこと

によって、両者の違いや音楽の特徴を意識しながら学習を進めることが可能になる。

3) 雅楽器

本授業では、「吹き物」である「三管（箏、龍笛、笙）」のみを扱った。「日本伝統音楽史」では、「弾き物」「打ち物」も加えた「管弦」や「舞楽」等、雅楽の概要を学習する。受講者は、「三管」の仮名譜、本譜を併記した唱歌を用いて音楽の流れを既に体験している。紹介されるDVDによる雅楽演奏の中でも取り分け「三管」の音楽的役割に耳を傾けることが容易にできるであろう。それを拠り所として、「弾き物」「打ち物」へと関心を向けることが可能となる。また、発音原理を同じくする中国伝統笙（17管）、蘆笙（21管）、タイやラオスのケーンも紹介し、アジアの民族音楽への関心を引き出したい。受講者には自らの関心に基づいてこれらの楽器が使われた実際の音楽に触れることを生活化して欲しい。

4) 二胡／馬頭琴

二胡については、本学学部教養基礎科目「東洋の文化研究」での学習に引き継がれ、中国伝統音楽の理解への足掛かりとなる。また、集中講義による「諸民族の音楽」の学びもさらに活性化されることが期待できる。馬頭琴は、小学校第二学年の「スーホの白い馬」を通して、よく知られているが、実際に楽器に触れたことのある受講者は少ない。馬頭琴は「草原のチェロ」と呼ばれるように、モンゴルの大草原の営みの中から生まれた楽器である。そして、「オルティンドー（長い歌）」「ホーミー」等のモンゴル民族の特色ある音楽への関心を持たせたい。

5) 金管楽器／木管楽器

西洋管楽器は、「管弦打楽器基礎Ⅰ・Ⅱ」（管楽器のみ）等において希望する楽器を一つ選択し、学習を深める。受講者によっては、高校までの学習経験から、ある程度の力を習得していても、他の楽器に関しての知識・技能は非常に限られている。一つの楽器のスペシャリストになるのならばそれでも良いであろう。しかし、音楽教師として管弦楽曲等を教材として取り上げる際に、各楽器・楽曲について幅広く捉える経験を積んでおくことが求められる。「管弦打楽器基礎Ⅰ・Ⅱ」では、希望する楽器の学習に加え、小編成の吹奏楽の合奏も行っている。個人練習や合奏を通して互いに観察し合い、その他の楽器や音楽に対しての経験値を少しずつ高めていくことが可能となる。

9. おわりに

本稿で示した形での授業は、既に10年が経過している。

初期の頃は、西洋管楽器と篠笛・尺八が中心であった。徐々に、雅楽器、世界の民族楽器等も扱うようになり、年度毎の受講者の状況や希望によって弦楽器（ヴァイオリン、チェロ、ギター）も含めてきた。全体の傾向としては、次第に和楽器・民族楽器に関する時間を多く割くようになってきた。

本授業が、図1「音楽科の教科内容を理解し授業を構成する力」に示された各授業の位置付けを参考にしながら、学生自身が現在の学びがどの段階にあり、今後、どの方向に進めていく必要があるのかを考える契機となることを期待し、学習キャリアノートの活用とともに、今後の学習の再設計を促し、着実な成長へと繋がるよう支援していきたい。その方策として以下の点を示しておく。

1) 和楽器関連の授業の再検討

1年次に受講した「和楽器」の力は、「中等音楽科教材論」等の授業で活用され、実践力を磨くことになるが、現段階では十分な力を得ているとは言い難い。そこで、「合奏」の授業に和楽器合奏を取り入れ、体験をさらに深める必要もあろう。また、「教職実践演習」において、和楽器指導の実際を体験的に学ぶ機会を作っていくことも可能であろう。このように現在の授業の枠組みの中で和楽器を活用することができるよう再検討したい。

2) 和楽器実践力の向上

ある特定の和楽器の世界に興味を抱いた場合、通常は、専門分野の先生に直接、対面によるレッスンを受けることが望ましい。しかしながら、現在の学生の状況では、同時に数種類の楽器のレッスンを受けることは難しい。そこで、学生自身にとって最も重要なものは、対面によるレッスンを定期的を受け、2番目以降のものは、最近、盛んに行われるようになった、インターネット上のSkype等を用いたレッスンを状況に応じて受講することを勧めたい。

3) 唱歌の活用

唱歌における擬声唱法は、日本伝統音楽のみならず、西洋の管楽器教育の分野でも、これまでも行われている。本授業で学んだ和楽器の唱歌による楽器の特性を伝える技を、西洋楽器の学習にも応用することにより、楽器の技法の伝達を越えて、音楽の表情を的確に伝えることがこれまで以上に可能となるであろう。そのためには、まず、多様な唱歌の実例を通して、体験的な学びを充実させる必要がある。

中学校音楽科「器楽」で求められる知識・技能は非常に幅広く、本授業で実践できるのは限られた内容に過ぎない。今日的課題である「日本伝統音楽をどのように授

業展開するのか」に対応する力を育成することを目指し、西洋音楽・日本伝統音楽・諸民族の音楽等のバランスを考慮した授業内容を検討した。今後も学生の状況を見ながら、理想的なバランスを求めて探求していきたい。

注

- 1 教員養成モデルカリキュラムの発展的研究 平成25年度研究成果「カリキュラム・ガイドブック」—第一次試案—, 鳴門教育大学, p.10, 2014. より本稿の目的に沿って一部修正した。
- 2 鳴門教育大学「2017年度授業概要(学校教育学部)」[ソルフェージュ][声楽(合唱を含む。)]「日本の伝統音楽(日本の伝統的な歌唱を含む。)」[器楽(合奏及び伴奏を含む。)]「日本の伝統音楽(和楽器)」[音楽の理論と歴史][指揮法](シラバス)より,
<https://lc-nue.naruto-u.ac.jp/syllabus2/>(アクセス確認2017. 6. 10)
- 3 金森信午, 東広島市立志和中学校, 平成15年6月27日 <http://www.hiroshima-c.ed.jp/web/an/j/on/on-j-1501.pdf> p.1 (アクセス確認2017. 6. 7)
- 4 寶山左衛門, 篠笛で吹く 日本の抒情歌集 第一集, 篠笛会, p.8, 1985.
- 5 高木いずみ, 藤井浩基, 尺八を用いた中学校音楽科の授業実践の試み—「鹿の遠音」を手がかりに—, 教育臨床総合研究11 2012研究, pp.119—133, 2012.
- 6 三代中尾都山, 都山流尺八楽譜「六段調」, 都山流出版協会, p.1, 1967.
- 7 比嘉憲龍, ちんだみ 工工四百選集(楽譜) 沖縄の古典と民謡, p.1, 2002.
- 8 藤枝美弥子, 第3学年 音楽科学習指導案 題材名 日本の伝統音楽に親しもう 教材名 雅楽「越天楽」, p.1 https://db.ice.or.jp/_wakaba2013/_docs/2015/w15-0068/w15-0068.pdf (アクセス確認2017. 6. 7)
- 9 伊野義博, 「越天楽今様」新たな視点によるアプローチ ～小学校6年生における授業の構成～, 新潟大学教育人間科学部紀要 第5巻 第2号, pp.135—172, 2003.
- 10 同上書, p.140
- 11 同上書, p.139
- 12 笹本武志, はじめての雅楽 笙・箏・龍笛を吹いてみよう, 東京堂出版, p.19, 2003.
- 13 文部科学省「中学校学習指導要領解説 音楽編」, p.76, 2008.
- 14 茂手木潔子, 邦楽百科 CDブック「日本の音Ⅰ 声の音楽Ⅰ」より「声で表現する楽器の旋律, 祭囃子」, 音楽之友社, p.223, 1999.
- 15 千原英喜, 混声合唱のための唱歌, 全音楽譜出版社, p.10, 1999.

